

ペット・ツーリズムの拡大と課題

青木奈央

近年、新型コロナウイルスの影響もあって、犬や猫を家族に迎え入れる人が増えている。ペットを飼う人が増えることによってペット・ビジネスが拡大することは必然であり、その中でもペット・ツーリズムは注目を集めている。ペット・ツーリズムとは、ペットと飼い主が宿泊施設に共に宿泊することや、休日に日帰りでドッグランに行くことやカフェと一緒に食事をするといった行動のことである。

これらの背景から、筆者は「日本国内においてペット・ツーリズムは実践しやすいのか」という問いをたてた。また、この問いに対してドッグカフェやドッグランといった、ペットと一緒に入れる・楽しめる施設数が不足していることや移動手段において公共交通機関が利用しづらく、自家用車を持たない人ではペット・ツーリズムの機会を失ってしまうのではないかと考え、「日本国内においてペット・ツーリズムは実践しづらい」という仮説をたてた。

この仮説を証明するために、第1章ではペット関連の施設数に着目した。日本国内にあるドッグランとドッグカフェの施設数と飼い犬の数のそれぞれを都道府県別に求め、二つの関連を調査し、日本国内においてペット・ツーリズムはしやすいのかを調査した。また、動物病院の数も都道府県別に求めることで、安心してペット・ツーリズムを実践することができるかも調査した。調査の結果、ドッグランとドッグカフェの施設数は飼い犬の多い都道府県に多く、飼い犬の少ない都道府県では施設数も少ないということがわかった。これらのことから、ペット・ツーリズムは実践しやすいと思われるが、施設数には地域によってかなり差があり、一概にペット・ツーリズムが実践しやすいといえないことが明らかになった。しかし、動物病院数はどの都道府県も充実しており、ペット・ツーリズムを実践するうえでの安心性は高いということが明らかになった。

第2章では、移動手段に着目した。自家用車、鉄道、飛行機、船、バス、タクシー、徒歩といったそれぞれの、ペットと利用する際の特徴や料金などを調査することで、日本国内でペット・ツーリズムは実践しやすいのかを調査した。その結果、自家用車を移動手段として選択する人が多い中で、日本国内のほぼ全ての移動手段がペットを受け入れており、飼い主には自家用車以外の選択肢があるということがわかった。しかし、アンケート調査を行った結果では、公共交通機関をペットと利用することに不安感を抱く人が多く、現状として、日本国内において自家用車を持たない人では、ペット・ツーリズムは実践しづらいということが明らかになった。

第3章では、海外のペット・ツーリズムの現状と日本のペット・ツーリズムの現状（ペットと一緒に入れる施設数や公共交通機関の利用）を比較し、客観的に日本においてペット・ツーリズムが実践しやすいのかを調査した。調査の結果、動物愛護先進国といわれているド

イツと比較をした際、日本のペット・ツーリズムが全体的に劣っていることが明らかになった。しかし、アメリカと台湾を比較した際は、日本と同じようなルールを設けていることがわかり、さほど日本と差がないように思われた。その中でも、日本はアメリカや台湾と比べてルールをしっかりと守る国民性もあり、ペット・ツーリズム実践における安全性は高く保たれている。その反面、ルールをしっかりと守るからこそペットとの行動範囲は狭くなっていると考えられることから、日本は外国と比較して、ペット・ツーリズムが実践しづらいが、その安全性は外国よりも高いということが明らかになった。

第4章では、第1章から第3章で明らかにしたことを整理し、仮説の「日本国内においてペット・ツーリズムは実践しづらい」ということを改めて明らかにした。

以上のことから、日本国内におけるペット・ツーリズムは、施設数は地域ごとに差があり、一概にペット・ツーリズムを実践しやすいとはいえず、移動に関しても自家用車を持たない人・ペットと公共交通機関を利用する人はペット・ツーリズムが実践しづらいこと、外国と比較をした際、ルールをしっかりと守るがゆえに行動範囲が狭くなり、仮説のとおりペット・ツーリズムが実践しづらくなってしまっていることが明らかになった。しかし、国内の動物病院数や海外とペット・ツーリズムの現状について比較しても、その安全性は高く保たれていることが分かった。